

## ■研究調査レビュー

## 貝塚時代後期土器と貝符

中村 直子（鹿児島大学埋蔵文化財調査室）

## 1 はじめに

日本列島の文化は、大きく3つに分かれるという見方がある。北海道の「北の文化」、本州・四国・九州の「中の文化」、南西諸島の「南の文化」である（藤本, 1988）。「日本史」として中学校・高校の教科書などに掲載されているのは、「中の文化」を中心としたものである。北海道の「アイヌ民族」や、沖縄を中心とする「琉球王朝」はよく知られているが、一般の人々が、それらの事象がどのような歴史的コンテクストを経て形成されたのかについて学ぶ機会はあまりないといってよい。しかし、現在「日本」としてくくられている社会が、多様な歴史と文化が混在して形成されていることを周知することは、現代の地域社会が抱える問題を理解する上でも重要なことと思われる。

本研究で対象とした貝塚時代後期についても、先史時代という現在から遠く離れた時代ではあるが、南西諸島独自の文化を生み出す起源ともいえる時期であり、この時

代の人々が選択した生活スタイルが、ひとつのターニングポイントとなっていると考えられるのである。

もともと、狩猟・採集を主な食料獲得手段としていた縄文時代（もしくはその並行期）までは、日本列島を通じて類似した文化を保有していたが、「中の文化」が本格的な農耕社会になった弥生時代以降に、その差異が拡大したと考えられている。

南西諸島の弥生時代以降の先史時代は、「貝塚時代後期」と呼称する。これは、弥生時代～古代併行期にあたる。貝塚時代後期は、農耕に関する考古資料がないことから、漁労・採集を主な生業としていたと考えられてきた。しかし、グスク時代はすでに農耕社会に入っていることから、貝塚時代後期のある時期に、その転換期があると考えられている（高宮, 2002）。「中の文化」では、農耕社会に入るのが紀元前5世紀とされているから、その間の、生業の違いによる文化的な差異が拡大したことも「南の

文化」を醸成するひとつの要因になったと思われる。

このあとに続く「グスク時代」は、南西諸島の中部圏（奄美・沖縄本島付近）を中心とした原初的國家が成立した時代であり、後に「琉球王朝」として収斂されていく。このような國家が、島嶼部で成立すること自体、人類史上では稀なこととされている（高宮, *ibid.*）。おそらく、貝塚時代後期において階層化がすすんだと考えられるが、その詳細な成立プロセスは明らかになって

いない。

これまで、貝塚時代後期の大きな特徴として、貝を中心とした九州・本州との交易がクローズアップされ、対外交渉の結果どのような変化が南西諸島社会に起こったかがクローズアップされてきたが、本稿では、南西諸島の日常生活品である土器と南西諸島内にのみ分布する貝符を検討に加えることによって、南西諸島の人々の指向性に注目し、貝塚時代後期の様相をみていきたい。

2. 貝交易と貝符

「貝塚時代後期」の文化を特徴付ける考古資料としてまずあげられるのが「貝」およびそれに関する資料である。

ひとつには、九州・本州との交易品として良く知られるゴホウラ・イモ貝・ヤコウガイである。これについては、木下（1996）の体系的研究があるが、弥生時代において、西北九州を中心とする地域で、威信財としてイモ貝製やゴホウラ製の貝輪（腕輪）が好まれ、その素材である貝を沖縄本島および周辺地域に求めていたことが、考古資料からうかがえる。この交易には西北九州・南部九州、沖縄以北島々の住人が携わっていたと考えられており、九州の土

	北海道	南 島	本州・四国・九州
前 1000			
前 500	縄文文化	貝塚時代前期の文化 (縄文文化)	縄文文化
1	.....	.....	弥生文化
500	統縄文文化	貝塚時代後期の文化	古墳文化
1000	..... 縄文文化	.....	奈良・平安時代
1500	..... ア 内耳土器の時代 イ ..... ヌ ..... 文 チェンジの時代 化	グスク時代	鎌倉・室町時代  江戸時代

表1 それぞれの文化の対照表  
(藤本, 1988) より

器が南西諸島で出土するほか、南西諸島の土器型式の中に弥生土器に類似したものがみられるなどから、頻繁な交流が行われ、多方面での情報交換が行われていたことがわかってきた。また、貝交易を契機として、南西諸島内での物流ネットワークシステムも確立されたと考えられている（新里，2001）。

これほどの頻繁な交流があれば、農耕技術の導入も可能であったと考えられるが、一方では、九州からの交易品として、穀類や酒、鉄などが想定されており、弥生時代並行期に農耕を導入しなくても、交易によって穀類を獲得できるシステムが確立していたことも予想できる。南西諸島における農耕導入の要因について、高宮（*ibid.*）は、フード・ストレスの可能性をあげているが、この段階では、農耕を導入するという方法で生活システムを変える必要はなかったとも考えられる。

6～10世紀においては、奄美本島のフワガネク遺跡のような、ヤコウガイを大量に加工した遺跡が確認されており、螺鈿の材料としてヤコウガイを交易品としていたと想定されている（高梨，2000・木下，2002）。

交易品としてだけではなく、利器、容器

のほか、装飾品など、様々な道具として貝を多用していることが南西諸島文化の特徴として指摘できる。中でも、貝塚時代後期の中ごろ、弥生時代後期～古墳時代並行期の「貝符」と呼ばれるイモ貝に彫刻を施す、装飾性豊かな遺物が北部圏から中部圏に広がっている。貝符は、アクセサリーや埋葬などに使用される儀礼用の道具として用いられている。

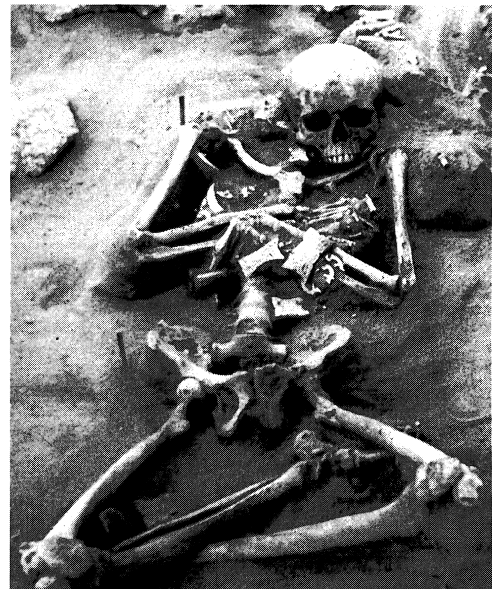


図1 広田遺跡埋葬状況  
（広田遺跡学術調査研究会，2003）より



図2 上層タイプの貝符（上段左）と下層タイプの貝符（右上下）

（広田遺跡学術調査研究会，2003）より



種子島広田遺跡は、その時期の埋葬遺跡で、被葬者の装身具として、また、副葬品として、多様で大量の貝製品が出土し、注目をあびた。広田遺跡での調査成果によると（広田遺跡学術調査研究会，2003）、埋葬状態や、出土遺物の型式学的検討から、おおまかに2時期に分けることができる。簡単に記述すると、広田遺跡には下層で確認された伸展葬と、上層で確認された集骨された二次葬がある。そして、それぞれに貝符が伴っており、下層のものは貝小玉などととも被葬者が身につけた状態で出土し、上層では人骨のそばにばらまかれた状態で出土する。また、貝符の文様や形も、新しいものほど簡略化され、ひも通しの孔と考えられる穿孔もなくなる傾向にあるなどの変化が追え、用途も、装身具を構成するパーツであったものから、単独で使われる儀礼用道具として変化する（以後、前者を「下層タイプ」、後者を「上層タイプ」とする）。

上層タイプは、下層タイプに比べ、種子島以外での出土量が多く、沖縄本島周辺まで分布する。ただし、埋葬遺跡で出土したのは種子島のみで、他地域で、広田遺跡のように多量に出土することもない。

上層タイプの貝符は、「中の文化」に類似するものがなく、「南の文化」独自の遺物であるといえ、北部・中部圏の人々が共通して持っていた独自の慣習やその背景にある世界観を反映しているものと考えられる。

### 3 土器の様相

#### 3.1.用途の比較

貝塚時代後期土器の様相は、大きく種子島・屋久島、トカラ、奄美地域、沖縄本島周辺、先島の5つの地域に分けることができる。それぞれの土器様相については、編年を中心に研究が行われており、最近安座間（2003）によって研究動向がまとめられた。これらを参考にしつつ、器種ごとの用

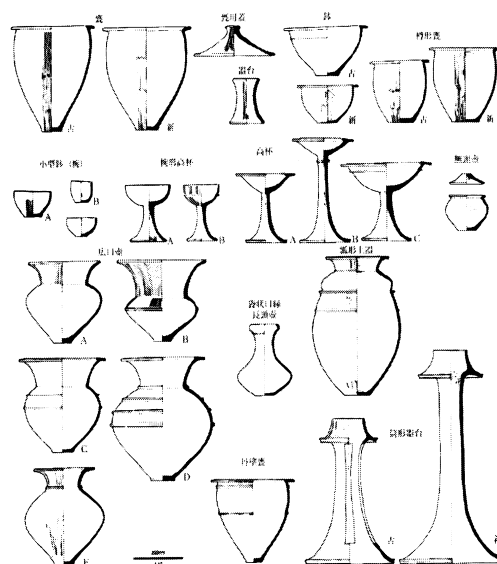


図3 北部九州の弥生中期土器  
（中園，1998）より

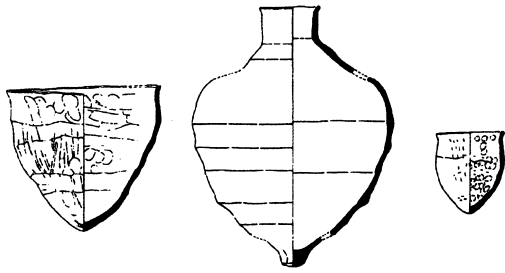


図4 沖縄の貝塚時代後期土器（大当原式）（新里，1999）より抜粋、一部著者改変

途に注目して、九州の土器様式と比較すると、以下の特徴をあげることができる。

まず、器種組成である。貝塚時代後期土器の器種には、煮沸具（鍋）としての甕、貯蔵用の壺、小型の鉢などがあるが、食器の高杯がないことが大きな特徴である。弥生土器は、甕、壺、高杯を基本的な器種とするが、高杯は、中国的な食器様式を取り入れたことを示すものとして考えられている（都出，1989）。当時の中国の史書にも周辺諸国の様子について、「豆（高杯のような脚がついた食器）」を用いているかどうか記されており、どのようなスタイルの食器を使っていたかということが、「文明度」の指標となっていたようである。

確かに高杯は、西日本で見ると、朝鮮半島に近く、大陸との頻繁な交流が認められ、いち早く「王墓」が確認できる北部九州から普及し始める。弥生社会の階層化が進む

中で、エリート層を中心に、中国大陸的生活スタイルを模倣し、次第にそれが浸透していく状況が土器に反映されているのである。

一方南西諸島では、その高杯がみられない。高杯は、より高いランクの食器として木器があったので、それを用いていた可能性もあるが、土器に高杯が見られないことから、ほとんど普及していなかったと考えてよいだろう。もしくは、食器は土器ではなく、木器を多用していた可能性もあり、少量の華麗な木器とを頂点として、底辺には多量の土器という階層性を持つ中国的食器様式を模倣しようとする弥生社会の志向性とは異なっていた可能性が高いといえる。

もうひとつの特徴としては、煮沸具の甕



図5 南九州の甕（左）と北部九州の甕（右）

である。古墳時代には、それまで地域色豊かであった土器様式から、「土師器」という斉一的な土器様式に変化する傾向にあるが、

南西諸島ではそれが全く見られない。古墳時代後半には朝鮮半島からの新しい技術が導入され、住居の中に、竈が作られるようになる。また、甕も普及しはじめ、甕は口がすぼまり長胴の竈使用に適した形態になる。

しかし、竈が導入されない南九州から南西諸島にかけては、甕を炉にすえて使用するため、広口の器形を保持し続ける。

以上のことから、「中の文化」に比べて、中国大陸的情報や慣習、技術を土器には積極的に取り込もうとする傾向がうかがえないということがいえる。

### 3.2. 貝符の文様と土器文様

貝塚時代後期土器の中に、奄美地域に分布する兼久式土器があり、およそ、6～10世紀ごろのものと位置づけられている。兼久式土器の中には、外面の上半部に沈線文によって文様が施されているものがある。

文様にはいくつかのバリエーションが認められるが、その中に貝符の文様に類似したものがある(中山, 1992)。これは、沖縄本島周辺でも少量見られる。また、フワガネク遺跡やマツノト遺跡などでは、兼久式に伴って上層タイプの貝符が出土している。

貝符に似た土器の文様をみると、左右対称の文様や、シャープな線で描かれている直線文や三角形のモチーフ、縦方向の文様など、それ以前の土器様式からは文様の系

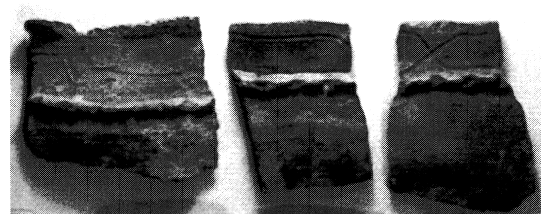
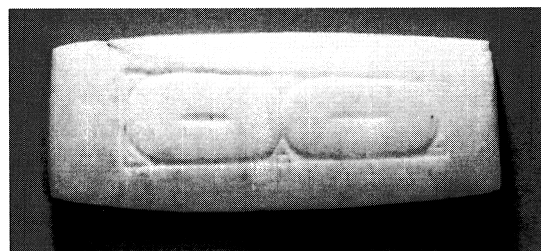


図6 フワガネク遺跡出土の貝符と貝符に似た文様を施された土器  
(高梨, 1999) より

譜を引くことはできない。そのような視点で見ると、種子島に分布し、ほぼ同時期であると考えられる上能野式土器の文様にも上層タイプの貝符の文様と共通する要素が見られる。

上層タイプの貝符は、穿孔され、アクセ

サリーとして使用された下層タイプのよりも、文様自体が重要視されたと推定できる。とすれば、土器に施された文様も、意味や価値が付されて、文様自体が記号化した可能性が考えられる。そして、これらが北部圏・中部圏に広がることから、この地域に共通した記号として認知されていたと推定できる。

貝符の文様については、中国大陸の青銅器に施された文様をその起源として考える説がいくつか提示されている（国分，1976・1991・金関，1964・新田，1984・1991）。

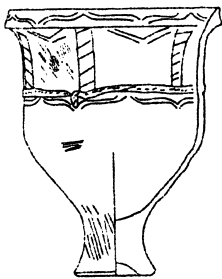


図7 上能野式土器（河口，1973）より

一方、下層タイプ貝符とセットとして使用された装身具の、多量で多種多様な貝製品を使用するスタイルを木下（2003）は、やはり中国の習俗に求めている。

これらを総合すると、貝塚時代後期文化に特徴的な遺物である貝符のルーツは、中国大陸に求められているということになる。

これには、前段階から系譜が引ける要素が少ないこと、また、隣接する九州にも類似する様相がないことも、その要因になっていると考えられる。さらに、弥生時代並行期には、沖縄周辺で中国大陸由来の遺物が多く出土しており、これらは北部九州経由で持ち込まれたという説が支持されているが、貝符が確認できる時期、弥生時代後期～古代並行期にはこれらが激減し、中国大陸の銭貨である開元通宝が南西諸島からよく出土することからも、中国大陸との直接的な交流が想定される要因であろう。

#### 4 まとめ

おもに、貝塚時代後期前半の土器と貝符について見てきたが、土器については、用途や機能で「中の文化」と比較すると、食器としての器種増加が見られないこと、甕の形から調理の際の煮沸形態も変わらず、伝統的なスタイルを保持し続けることが指摘できる。しかし、その形態は、九州の弥生土器に類似するものもあることから、交易品として、もしくは容器として運ばれた九州の土器を真似るような、ある程度表層的な情報の取り入れ方だったのではないかと考えられる。

貝符は、南西諸島特有の遺物であるが、

その文様の起源や、装飾品の様式から中国大陸に起源が求められている。しかし、これはその習俗や文様が伝播してたどりついた結果なのか、中国大陸から人が渡来してきてダイレクトに伝わったのかということについては、明確になっていない。また、矢持（2003）が指摘するように、「相互批判されぬまま（中略）定説化してしまっている」感は否めない。

食器様式や調理方法等が反映される土器からみると、中国的な要素が見られないため、中国大陸からダイレクトに導入されたとは、積極的には支持できない。貝製品が多く出土した広田遺跡にしても、土器から見ると、伝統的なスタイルを保持していると考えられるのである。

中国大陸的であると考えられている様相が、どのような経緯で貝塚時代後期社会に受け入れられていったのか、もしくは本当に中国を起源とするものであるのかを解明するには、日常的な生活復元の研究が不可欠である。しかし、種子島・屋久島および奄美地域では、貝塚時代後期前半期の生活遺跡がほとんど確認されておらず、データが不足している状況にある。目下、現在発見されている遺物の詳細な分析に加えて、

立地分析や表面採集調査などによる、生活遺跡の特定を継続して行っており、発掘調査に適した遺跡を探索中である。今後、発掘調査も含めて、当時の日常生活に密着したデータを収集し、残された課題の解明を試みたい。

## 文 献

- 安座間充, 2003. 琉球列島の古墳時代併行期前後の様相. 前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性. 145-173. 第6回九州前方後円墳研究会事務局.
- 金関丈夫, 1964. 種子島広田遺跡の文化. FUKUOKA UNESCO, 3.
- 河口貞徳, 1973. 奄美における土器文化の編年について. 鹿児島考古, 9.
- 木下尚子, 1996. 南島貝文化の研究. 法政大学出版社.
- 木下尚子, 2002. 貝交易と国家形成. 先史琉球の生業と交易. 熊本大学文学部.
- 木下尚子, 2003. 貝製装身具からみた広田遺跡. 種子島広田遺跡. 鹿児島県歴史資料センター黎明館.
- 国分直一, 1976. 蝶形貝札と獣形垂飾. 環シナ海民族文化考. 慶友社.



- 国分直一, 1992. 種子島広田遺跡埋葬遺跡上層の貝符の彫文をめぐる問題. 古代文化, 44-4.
- 新里貴之, 1999. 南西諸島の弥生並行期の土器. 人類史研究, 11.
- 新里貴之, 2001. 物流ネットワークの側面－南西諸島の弥生系遺物を素材として－. 南島考古, 21.
- 高梨修, 1999. 小湊・フワガネク (外金久) 遺跡. 名瀬市教育委員会.
- 高梨修, 2000. ヤコウガイ交易の考古学－奈良～平安時代並行期の奄美諸島. 交流の考古学. 朝倉書店.
- 高宮広土, 2002. 植物遺体からみた奄美・沖縄の農耕のはじまり. 先史琉球の生業と交易. 熊本大学文学部.
- 都出比呂志, 1989. 日本農耕社会の成立過程. 岩波書店.
- 中園聡, 1998. 九州弥生丹塗り土器の検討. 人類史研究, 10.
- 中山清美, 1992. 奄美における貝符と兼久式土器. 奄美学術調査記念論文集. 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所.
- 新田栄治, 1984. 薩摩・奄美・沖縄諸島出土の貝符と文様. 南西諸島の先史時代に於ける考古学的基礎研究. 鹿児島大学法文学部考古学研究室.
- 新田栄治, 1991. 貝符文様の型式学. 交流の考古学. 肥後考古学会.
- 広田遺跡学術調査研究会, 2003. 種子島広田遺跡. 鹿児島県立歴史資料センター黎明館.
- 藤本強, 1988. もう二つの日本文化. 東京大学出版会.
- 矢持久民枝, 2003. 広田遺跡出土貝符の検討. 種子島広田遺跡. 鹿児島県立歴史資料センター黎明館.